

岩井俊二小説『ウォーレスの人魚』と香港映画 『人魚傳說』『美人魚』とをめぐって

張瑤

はじめに

1842年、アヘン戦争終結のために結ばれた南京条約の結果、清朝はイギリスに香港島を割譲した。その時、香港の人口はわずか5000人であったという¹。1982年9月にイギリスのサッチャー首相が訪中して、香港の97問題をめぐり鄧小平と交渉するも難航、その後83年末に至ってイギリスは全面譲歩し、翌年の12月19日に中英共同声明が正式調印された。香港の統治権は1997年7月1日にイギリスから中国へと移ったが、中国はこれを「香港の中国回帰」と呼び、返還後の香港では「一国両制度」の実施が約束された。

岩井は香港返還に強い関心を抱いて、香港返還の前日に香港の各地を訪れて、その風景を記録していた。その巡礼の旅の一つの目的は、旅の前に執筆し始めたある小説の「細部に渡るプロットのチェック」²である。この小説は長編の『ウォーレスの人魚』であり、1997年9月25日に角川書店より上梓された。この小説は岩井文芸における「香港史」の位相の総括であるが、映画化されていないためか、東アジアで流行することもなく、日中の文化界はいずれもこれを重要視してこなかった。本章はこの忘却されてきた作品を取り上げて、岩井俊二が人魚という表象を通して描いた香港の植民地としての歴史と「回帰」について分析する。これに加えて、返還前後の香港映画監督による二作の人魚映画、1994年の『人魚傳說』（羅文監督）および2016年の『美人魚』（周星馳監督）にも注目して、日本と香

1 藤井省三『現代中国文化探検—四つの都市の物語』、岩波書店、1999年、121頁。

2 『SWITCH』1997年9月20日、スイッチパブリッシング。表紙カバーには「LAST TANGO Iwai Shunji」という文字とともに、岩井俊二が両手に大きな文字で「祖國、母親：—香港回帰了（母親のもとに帰ってきた香港）」と書かれた新聞『香港商報』の七月一日零時号外を持って微笑む写真があしらわれている。

港の映画監督が描く人魚と香港の関係性を考察し、香港の人魚をめぐる表象とその系譜的關係を検討したい。なお、返還前後の香港と人魚の表象の問題について掘り下げた先行研究は寡聞にして知らない。

人魚とは「半魚半人」の想像上の生物であり、ギリシア神話では邪悪で危険なセイレーンとして否定的なイメージと共に登場していたが、近代に至りハンス・クリスチャン・アンデルセン（1805～1875）が『人魚姫（The Little Mermaid）』において無垢な少女としての人魚を描き、従来の人魚像を一変させた。『人魚姫』では、人魚の王の末の姫が15歳の誕生日に、海で嵐に遭った王子を救出し、恋心を抱いてしまう。海の魔女に魚の尾を人間の足へと変えてもらうのと引き換えに、姫はその美しい声を失い、王子に真実を告げられぬまま、他の娘と結婚する王子を短剣で殺すか、それとも海の泡となって消えるかという選択を迫られる。人魚姫は愛する王子を殺すことができず、空気の子となり天国へ昇っていく。このように純粋な愛のために自らを犠牲にした人魚姫の物語が広く知られるにつれて、人魚のイメージは危険な誘惑者から愛に殉じる犠牲者へと変容を遂げ、同時に人間と人魚の間の悲劇的な恋という近代における典型的イメージが定着したと考えられる。

日本にも人魚にまつわる実見談は古くから存在し、早くは『日本書紀』（720年）に人魚らしいものが現れたという記事が見える。神谷敏郎の指摘によれば、江戸時代に人魚が図解に載った例として、寺島良安による日本最初の図入り百科辞典『和漢三才図会』（1713年）とオランダ伝来の西洋の妙薬六種の解説書『六物新志』（1786年）があるという。³「人魚」には時代や地域を越えて不思議な魅力が潜んでおり、井原西鶴・蒲原有明・太宰治・安部公房ら日本文学を代表する文学者も「人魚」に惹きつけられ、「人魚」をモチーフとした作品を創造した。そこに共通する認識としては、人魚は上半身が女身で下半身は魚の形をした想像上の生物であるということがあり、このほか人魚は不老不死の象徴で、その肉を食べると若返るとの俗信も存在してきた。

その一方で、香港の映画研究者である黄淑嫻は、香港は「二つの植民者（英

3 神谷敏郎『人魚の博物誌』、思索社、1989年、17頁。

国と中国)のはざまで、女性化されたポジションに位置づけられている」⁴と述べた。女性化された人魚という表象は、香港を解釈するにあたって多様な可能性をもたらすものである。これに先立ち、香港出身のアメリカの研究者周蕾が1990年代に、「『中国的な』と『西洋的な』とのあいだの弁証法的対立が展開される土俵として」⁵の香港の不安定性を論じている。植民地の歴史が香港に付与した特性である不安定性を、周蕾が論じる「ギヴンネス (Givenness)」と同一視するなら、「受動的なものとしてではなく能動的な原理として理解しなければならない。『ギヴンネス』は動作主体なのだ。」⁶と解釈できる。すなわち、香港の「ギヴンネス (不安定性)」は、能動的動作の主体としての役割をも果たしているのである。香港をめぐる人魚表象とは、この不安定性がそれぞれの時代において巧みに描き出されたものではあるまいか。西洋化・女性化されて不安定性を持つ香港が、中国への返還前後でいかなる変容を遂げたかという疑問を念頭において、90年代以後の三時期における人魚をめぐる三作を考察していきたい。

一、香港の“中国回歸”前の可憐な「美人魚」——羅文の『人魚傳說』について

1994年に香港で、孤児の少年と一匹のシャチを描いたハリウッド映画『人魚童話 (Free Willy)』と、南米のある一家の50年間にわたる盛衰史を描いた『第六感之戀 (the house of the spirits)』が上映された。同じ年の10月に公開された、人魚と人間の恋愛を描くコメディ映画『人魚傳說』(Mermaid got married)は、上記の作にあやかっか「第六感奇縁之人魚傳說」とも呼ばれた。この映画を監督した羅文(原名:譚百先、ロマン・タム、1944～2002)は日中戦争中に広西の百色で生まれ、広州で育ち、18歳の時に香港へ移住した。その後1968年に歌手としてデビューし、1974年から1977年まで日本で事業を展開するなど、2002年に肝臓ガンで

4 黃淑嫻「政治的な男たちの絆と香港女性」、『男たちの絆、アジア映画 ホモソーシャルな欲望』所収、平凡社、2004年、199頁。

5 周蕾著、田村加代子訳『女性と中国のモダニティ』、みすず書房、2003年、9頁。

6 周蕾著、田村加代子訳『女性と中国のモダニティ』、同上、2003年、9頁。

亡くなるまで香港音楽界の重鎮であり続けた。歌手として最も有名な仕事の一つとしては、1983年にテレビドラマ化された『射雕英雄傳』（原作は金庸の小説）のテーマソング『世間始終你好』がある。

『人魚傳説』の主演女優には鍾麗緹（クリスティー・ジョング、1970～）が選定されており、その経緯も興味深い。彼女は中国とベトナムのハーフで、「北米のパリ」と呼ばれるカナダ・モントリオール育ちで、英語とフランス語のネイティブスピーカーであり、フランス文化の雰囲気漂わせている。彼女は1993年にミス華僑コンテストで優勝して香港芸能界にデビューし、1994年初、周星馳（1962～）が監督した映画『破壞之王』で初めて女性主人公をつとめ、健康的かつセクシーな魅力を発揮した。さらにその後1994年7月末、2千万香港ドル以上を投資して作られた『中南海保鏢』（The Bodyguard from Beijing）の女性主人公に抜擢される。この映画のストーリーは以下のようである。主人公である許正陽は北京育ちのクールな用心棒で、中南海（北京の中心部紫禁城の西側に位置する政府要人の居住区）で政界重鎮の護衛を務めていた。ある時香港に派遣された許は国際学校の女教師である楊倩儀のボディガードをすることになり、様々な危機を経て二人は恋に落ちる。映画の宣伝用ポスターを見ると、中南海の用心棒である許が中央で勇敢にも銃を構えて敵を威嚇しており、その後ろに身を隠した楊は怯えた様子で許に縋りついている。そこには性別による「強」と「弱」、また「保護者」と「被保護者」の対照が鮮明に表現されている。このポスターはすなわち、中南海の用心棒に擬された大陸と、西洋化され女性として表象された香港との力関係を示唆したものと捉えることができ、香港返還前の1994年にこの作品が創られたことは注目しに値する。この役柄は鍾麗緹のその後のキャラクターイメージに強い影響を与えたと見え、例えば直後に出演した『人魚傳説』では恋する人魚役として、天真爛漫でありながら蠱惑的な女性を見事に演じきっている。

『人魚傳説』の男性主人公阿志（鄭伊健）は高校の代講教師で、海で遭難した経験があるため泳げない。ある日、海辺で溺れた阿志は人魚に助けられ、魔法の真珠で命を救われる。ところが真珠を失った人魚は海に戻るができなくなり、やむなく人間の姿に変身し、転校生の「小美」とし

て阿志の学校に潜り込む。阿志と小美とは次第に惹かれ合うが、半人半魚であるという事実が明るみに出て、小美は海に帰らざるを得なくなる。この『人魚傳說』に登場する「美人魚」は、流暢な広東語や英語を操り、人間の足と魚の尾を自由に取り替え、人間との恋愛も順風満帆である。彼女は90年代の香港社会に経済・言語・知識のあらゆる面で適応しており、「王子」ならぬ香港ボーイとの意思疎通も可能なのである。

映画中では「美人魚」の信憑性を高める道具として、実在の香港の大衆紙『東方日報』の「香港開埠首次發現美人魚——長髮大眼睛樣貌嬌俏（香港開港以来、初めて人魚が発見される——髪が長く目が大きく艶かしい姿）」や「本港水族館發現美人魚——樣貌甜美仿如神話（香港水族館が人魚を発見——愛らしい姿は神話のよう）」⁷という記事が用いられている。さらに、それを補足するように虚構の雑誌『アメリカンサン』の記事「1973年4月アラビアの西海岸で人魚を発見、その後人魚は出沒せず。1991年8月フィリピンで完全な人魚を発見。」⁸ももっともらしく引用されている。90年代後半、香港映画が衰退期に入る頃のコメディ映画においては、『人魚傳說』のように細部にまで巧妙に工夫を凝らすものは減多になく、同作を凡庸なコメディ映画と同一視してはなるまい。

次のシーンは、小美の正体に気づいた校長・教務秘書・警官・富豪が魚取り「四人組」を結成し、大雨の中で人魚の姿に戻った小美を捕え、電気鉄条網を張り巡らせたプールに閉じ込めるところ⁹である。

「游得再快也跑不掉的！再嚇嚇她，好不好？（いくら速く泳いでも逃げられやしないさ！また脅かしてやろう、いいかい？」富豪、自慢げに言う。「好啊！好啊！（いいね！いいね！）」校長と校長秘書、拍手しながら賛成する。

「還有啊，我从中南海請来了两位保鏢由他們監視，萬無一失呀。（それから、僕は中南海から監視役として二人の用心棒を雇ったので、絶対に間違いな

7 映画『人魚傳說』、Wishing Well Film Company、1994年。

8 映画『人魚傳說』、同上、1994年、01:05:01。

9 映画『人魚傳說』、同上、1994年、01:15:31。

いよ)」

警官、両手を組んで傍観し「別説那麼多啦，我們來研究怎麼發財吧（お喋りはたくさんだ、われわれはどうやって金儲けをするか考えるとしよう）」。

「對，對，發財！」（そうだ、そうだ、金儲けをしよう！）四人組、ワイワイしながら室内に戻っていく。

このシーンにおける「半人半魚」、「半中半西」の人魚は、教育・行政・法務・金融を象徴する人物たちによって苦境に追い込まれ、畏怖の念や無力感に苛まれている。これは映画の公開当時、天安門事件後の香港が返還を前にして、政府に対し不信を、未来に対し不安を感じていたというパニックの状況を想起させる。換言すれば、この人魚（不運）は「恐共症（共産党恐怖症）」を患った香港人の情緒を表現しているのではないか。映画の最後で、人魚小美は一度は適応した人間社会と決別して海へと回帰するが、その直前に、人間の阿志と別れを惜しんで次のような言葉を交わす。

小美：我只是一條魚，你會喜歡我嗎？（私はただの魚だけど、私のことを好きになってくれる？）

阿志：會，是神話嘛。（好きになれるよ、神話だからさ。）

...

小美：我現在不能不走，給我一點時間。如果我們有緣的話，我會回來找你。（私はもう行かなくてはならないので、少し時間をください。もし、私たちに縁があれば、私は戻って会いにきます。）

阿志：答應我，一定要回來。（約束して、必ず戻って来ると。）

小美：我走了。（もう行きます。）

阿志：我等你。（君を待っている。）

人間社会に未練を残す小美が劣等感を抱き、自分を「ただの魚」と認識しているのに対し、阿志は敬意をもって、小美を「神話」として理解し、同時に「他者」として人間の中から排除してしまっている。

映画の公式ポスターには「這是一個遙遠的傳說但是它真實的發生了（これは遙かに遠い伝説であるが、本当に起きたことである）」と記されている。また、映画タイトルに「傳説」という言葉が用いられているのは、長年信じられ語り継がれてきた「伝説」が本当に現実化したという意味なのであろう。ここにいう伝説というのが、19世紀末に締結され、99年に有効化した中英条約を暗に指していると考えるのは、果たして穿ち過ぎであろうか。要するに、女優の選定、映画の宣伝および主旨の設定には「伝説＝香港返還」、「人魚＝香港」、「海＝中国大陸」、「四人組＝権力機関」というメタファーが読み取れる。小美が阿志と陸で暮らすか海に帰るかという選択を迫られた時に、一旦は阿志に与えた真珠を返却してくれるよう請求することは非常に重要である。この真珠は天然の良港を誇る「東方明珠」としての香港の象徴であり、美人魚の魅力の中核といえよう。

二、岩井俊二と香港——「回帰」小説としての『ウォーレスの人魚』

1997年7月1日の深夜2時、九龍・重慶マンションのゲストハウスで香港の中国返還のセレモニーを見ていた日本人の映画監督・小説家がいた。彼は祝賀のために打ち上げられた花火を見ながら、「すさまじいな…中国人の香港返還に懸ける思いが強烈だなんて。この情景って夢みたい」と言った。その日本人とは岩井俊二である。1997年6月30日と7月1日の2日間、香港が99年ぶりにイギリスから中国に返還された瞬間を祝う喧騒を、岩井俊二は自らビデオカメラで記録したのであった。岩井俊二に同行した編集者の新井敏記はその言動を以下のように書き留めている。

「6月30日、イギリスの香港統治最後の日、その日1日、岩井はデジタルビデオカメラ1台を手に香港の街をくまなく歩き、香港の人々を映画『スワロウテイル』の円都の移民たちのイメージを重ねていった。」¹⁰。岩井俊二はカウントダウンの時間が表示された蘭桂坊の映像を撮りながら、「かつてアヘン戦争後の1842年、南京条約により、香港島がイギリスに割譲さ

10 岩井俊二「香港のいちばん長い日」、新井敏記『人、旅に出る－「SWITCH」インタビュー傑作選』所収、講談社、2005年、222頁。

れたのを発端に、60年の北京条約で九龍半島の先端部も割譲され、1898年九龍租借条約により、九龍の北にニューテリトリー、新界地区以南が、99年間イギリスの租借地となった。」¹¹と即席のナレーションをつける。…「もう一つのスワロウテイル」そう言うと岩井俊二は小さく笑った。

岩井は1996年9月に、中国のかつての植民地を原型にして、日本にある架空の移民の街「円都」を描いた。それが映画『スワロウテイル』である。岩井は「『スワロウテイル』の撮影地は、上海の日本人租界の一角をロケハンした時に見つけた。架空の物語、たとえば宮澤賢治や北原白秋の香りが漂う、百年前の幼い人魚が住んでいるような街のイメージだった。」¹²と語る。すなわち、岩井俊二は植民地を日本の人魚物語の舞台と結び付けたのである。

日本の人魚物語といえば、小川未明が1921年に発表した童話「赤い蠟燭と人魚」¹³がすぐに思い起こされる。寂しい北の海に住む人魚の母は、生まれた娘を優しい人間のもとに置いていく。足が鱗になっている人魚娘は蠟燭屋の老父婦に託されて、はじめは大切に育てられるが、最後には不吉なものと見なされ大金で売られてしまうのであった。人魚は寂しい海から離れて、賑やかな人間社会に身を置くが、親代わりの存在に裏切られるという残酷な物語である。岩井の『ウォーレスの人魚』は石井竜也監督に促されて書き出した作品¹⁴であり、「赤い蠟燭と人魚」の影が見てとれるが、人魚を通じて香港を描いた点において異色作と言える。

この作品は、序章「片鱗」（19世紀 香港）、第1章「海人」（2012年 セント・マリア・アイランド）、第2章「眷属」（2015年 日本）、第3章「鱗女」（2015年 香港）、終章「人魚」（2016年 フロリダ・キーウエスト アラスカ・ベーリング海）から構成される。物語はウォーレスが19世紀末の香港で人魚に出会ったこと、また香港の大富豪海洲全の息子海洲化と

11 新井敏記『人、旅に出る』、同上、2005年、222頁。

12 新井敏記『人、旅に出る』、同上、2005年、221頁。

13 『小川未明童話全集』、第1巻、講談社、1950年11月15日。

14 岩井俊二『ウォーレスの人魚』、角川書店、1997年、416頁。

結婚した人魚について記録した『香港人魚録』という奇書の紹介によって幕を開ける。同書は岩井によるフィクションであるが、ウォーレス（Alfred Russel Wallace、1823～1913）は実在の人物で、イギリスの「進合理論」の博物学者・社会運動家・探検家として広く知られ、生物地理学や人類学、心霊学に大きな貢献をした。『ウォーレスの人魚』とは以下のような物語である。

2012年、セント・マリア島で育った、海洋生物学者の一人娘で「アジアの血が混じってる」¹⁵とされるジェシーは、2本足の人魚を目撃する。その3年後、遭難事故によって沖縄の海底に沈んでいた大学生の海原密が、遭難から2ヵ月後に奇跡的な生還を果たす。実は1996年香港赤柱生まれの海原密は、13歳まで香港で暮らし、その後日本逗子に移住した「中国人の血と海に住む人の血が流れている日本人」¹⁶であった。2015年、日本人の海原密とアメリカ人のジェシーは香港で出会い、同年同日生まれの二人は互いに恋に落ちてしまう。彼らは『香港人魚録』に出てくる人魚の子孫であり、自分たちの出生の秘密とアイデンティティーを探す冒険を始める。作中の人魚は陸上人魚（人間の姿をしている）と海中人魚に分けられており、海中人魚のイメージはといえば、「二本の足がある。…水中人間と呼ぶべきか、あるいは鱗人間、海人…呼称は何とでも可能…肌は透き通るように白く、頭部には褐色の長い毛髪まで生えて」¹⁷いる、うるう年生まれの不吉な不老長寿の生物として描かれている。人魚が実の母ではない他人の夫婦に託される設定は、小川の童話から影響を受けているのであろうが、それよりもここで注目すべきは、岩井が人魚と香港との関連性を明示している点である。

物語の主要人物は、「九龍租借条約が締結された1898年は図らずも海鱗女が妊娠した年である。そして海原密が産まれた1996年は香港が中国に返還されるわずか1年前。ちょうど香港の歴史の区切りにそれぞれ海鱗

15 岩井俊二『ウォーレスの人魚』、同上、1997年、265頁。

16 岩井俊二『ウォーレスの人魚』、同上、1997年、238頁。

17 岩井俊二『ウォーレスの人魚』、同上、1997年、119頁。

女と海原密が存在していた。」¹⁸と設定されている。岩井はこれを「人魚のミッシング・リング」と呼び、「アヘン戦争後 1842 年、南京条約により香港島がイギリスに割譲されたのを発端に、60 年の北京条約で九龍半島の先端部も割譲され、そして 1898 年九龍の北の新界地区が 99 年間イギリス租借地となった。1997 年、中英共同宣言によって中国に返還されるまで、香港はイギリスの領土だったわけである。この約百年間が香港にとって運命的な時代であったことは言うまでもないが、マームエイドの研究者たちにとってもこの数字は重要な意味を持っていた。彼等はこの期間を『人魚のミッシング・リング』と呼んでいた。」という説明を加えている。すなわち、登場人物としての人魚の母、祖父の中国人海洲全、人魚の海鱗女、二人の人魚の子孫という人物関係は植民地香港の歴史と緊密な関連を有しており、岩井は人魚と海家の三世代を通じて香港の植民地としての歴史を総括しているのである。

物語の設定においては、「回帰」が重要なテーマとなっている。まず人魚と人間の交配する方法としての「癒合」は、「胎内回帰願望、生まれた雄は最後には雌の体内に癒合される自然な愛の儀式」であり、一種の回帰と理解していいだろう。そして、香港返還の直前に香港で生まれ、すぐに海外に離散した双子の人魚姉弟が香港で再会して故郷へ向かうというプロットからも「回帰」の重要性が読み取れる。また、母体から分離したこの二人の若い人魚は、最終的に自分の実の母のもとに戻って行くが、これも回帰の達成という意味をもつと考えられる。さらに、小説の最後の一節は「海に還る」であり、二人の人魚の運命的回帰を強調している。作中の人魚は妊娠から出産までに百年の歳月を要しているが、九龍租借条約の締結から約百年の妊娠期間を経て、海原密とジェシーが生まれていることは意味深い。彼らの母体への回帰は、かつて大陸という母体から分離されて植民地となった香港が、今や中国へ回帰していくことに符合している。『ウォーレスの人魚』における以上の四重の回帰は、岩井の香港返還体験の強烈的な反映であると理解できる。

最後に、物語の核的なテーマとして、タイトル中の「ウォーレス」の

18 岩井俊二『ウォーレスの人魚』、同上、1997 年、298 頁。

意味するところに注目したい。作中に博物学者として登場するウォーレスは「人魚にロープを巻きつけて泳がせる。人魚が海を泳ぐ間にロープには藻の類がからみつく。…ロープを回収し、分析すれば人魚がどこか〔ママ〕を道筋で泳いだかがわかる」¹⁹という実験を行って失敗し、「私は彼女を人間だとは到底思えなかったのだ。あれは生物だった。私にとってあれは人間ではない生物だった。それは非道い偏見だった。」²⁰と懺悔するに至る。彼はまた 1913 年に出版した『香港人魚録』の最後に「(人魚は) もともと海に住んでいた種である。海に還るのが正しいのだ。…そっと海に還してくれることを切に願う。」²¹と記すが、同年その願いが叶えられないままに世を去る。この「進化論」を唱えるイギリス人の登場は、社会的関係の原因を生物学に求めることによって各人種間に根本的な優劣の差異が存在するとの主張を正当化せんとする社会進化論 (Social Darwinism) と人種主義 (Racism) をわれわれに想起させる。ウォーレス (イギリス、本国、人間) と人魚 (香港、コロニー従属、非人間) という鮮明な対照を背景としたうえで、人魚の家族にとってウォーレスは自分たちを圧迫する存在であると同時に、ある意味では恩人 (扶養者) でもあるという複雑な関係が展開されるのである。結末部のウォーレスの残虐な実験の失敗と懺悔、そして二人の人魚の冒険と回帰は、共に香港の植民地時代の閉幕を寓話的に語っているのだろう。

中国語訳簡体字版『ウォーレスの人魚』は南海出版社によって 2008 年 8 月に出版され、その後 13 回増刷された。新經典文化出版社の資料によると、2014 年 12 月末までに 5 万冊が完売したという²²。2013 年 11 月 16 日、台湾でも初めて繁体字版『ウォーレスの人魚』が出版され、文化界からも注目され始めている。しかし、両版は共にタイトルを『華萊士人魚』と訳

19 岩井俊二『ウォーレスの人魚』、同上、1997 年、336 頁。

20 岩井俊二『ウォーレスの人魚』、同上、1997 年、354 頁。

21 岩井俊二『ウォーレスの人魚』、同上、1997 年、17 頁。原文：Originally the mermaid was a marine species, so it would be very natural to return her to the ocean....But you would leave her to the ocean.

22 新經典文化の編集者に対するメールインタビュー、2014 年 4 月 2 日。

しており、原題の「華萊士」と「人魚」の所属関係を曖昧化している。なお付録として作中の出来事を図表化したので参照されたい。

三、『美人魚』における中国への返還後の「香港情念」

周星馳（ステイーヴン・チョウ）は1962年6月22日香港生まれで、90年代には出演作に必ず多くの観客を動員する俳優となるに至っており、「無厘頭（広東方言では「莫釐頭尻」、理不尽という意味。周星馳のユーモアスタイルを指す）」という演出スタイルを自ら創出したことで知られる。1993年初めて監督・主演した『唐伯虎點秋香（Flirting Scholar）』が好評を博し、1994年には共産党スパイを演じて官僚制度を揶揄する『国産凌凌漆（From Beijing with Love）』を製作した。1996年、映画製作会社・星輝海外を設立し、単独での監督デビュー作『少林サッカー』（2001年）で香港電影金像賞を獲得した。2013年には廣東省政協委員に就任して注目を集めてもいる。彼の最新作である『美人魚』は2016年2月8日、春節に中国各地で上映された。映画の興行成績を集積し分析するサイト「Box Office Mojo」²³の統計によれば、『美人魚』（2016）は2016年の2月19日から4月7日までの7週間のうちに106軒の映画館で上映されている。香港での上映初日の興行収入は490万香港ドルで、香港映画市場の映画上映初日における興行収入最高額を記録した。大陸でも上映開始後、19日目に興行収入が30億人民元を超え²⁴、中国映画史における興行収入の最高記録を更新した。また「電影票房網」の統計によれば、『美人魚』の最終的な興行収入は実に33.9億人民元に達したという²⁵。

『美人魚』の男性主人公劉軒は貧乏な子供時代を過ごす、裸一貫で身代を築き上げた後は拝金主義者となる。彼は87年の株価大暴落、97年の金融危機、2002年のSARS（重症急性呼吸器症候群）を経た後、不動産の投資家である富裕な美女・若蘭と協同して「青羅灣プロジェクト」なる

23 <http://www.boxofficemojo.com/movies/?id=mermaid2016.htm>

24 肖揚「給周星馳《美人魚》票房算算帳」、《北京青年報》、2016年1月29日。<http://cul.sohu.com/20160229/n438823811.shtml>

25 「電影票房」『美人魚』興行収入。<http://58921.com/film/2882/boxoffice>

計画を立て、強力なソナー（音波を発射し水中の物体を探知する機械）を使用して湾内の生態環境を破壊したため、そこに棲息していた人魚の一族はその多くが死傷し、悲惨な境遇に追い込まれる。一族を代表する人魚・珊珊は美人計で復讐しようとするが、劉と恋に落ちてしまう。最後には劉が反省し、環境保護をめぐる人魚一族と和解するに至り、心を改め穏やかで無私無欲の生活をするようになる。

この映画をめぐる従来の評価を振り返ると、そのほとんどは環境問題と異種間恋愛に焦点を当てた解釈に集中している。たとえば映画評論家の李多鈺は「一百分、春晚標準。（満点、「春晚」の基準でいえば）」²⁶とコメントした。「春晚」とは「春節聯歡晚会」の略称で、中国中央テレビが毎年旧正月の前夜に放送する特別芸能バラエティであり、視覚効果やイデオロギー宣伝を重視したものである。すなわち、李はこの香港映画は大陸の一般的な観衆の審美に迎合した作品であると暗に揶揄しているのである。そのいっぽうで、香港のある映画評論家は「海洋の埋立による金儲けと環境問題とを扱ったこの映画が、大陸と香港の両方で商業的に成功をおさめたのはきわめて珍しく特例的なことである。ほとんどの場合、このような大陸で成功した映画が香港でも商業的に成功するとは限らない、たとえ香港の映画人が製作したとしてもだ」²⁷と述べている。映画の主要人物を演じる四人の俳優は、三人が大陸出身、残り一人が台湾出身である。いっぽう『美人魚』の脚本家グループ²⁸は、大陸出身の盧正雨（1983～）を除いて全員が香港の脚本家であるが、周星馳の長年の脚本パートナーである李思臻は、「Facebook や微博に載っているたくさんの面白いジョークに目を通し、それらからインスピレーションを得て自分の脚本に書き込んでいく」²⁹

26 李多鈺騰訊微博、2016年2月8日。<http://t.qq.com/p/t/472391015959478>

27 『南華早報』、2016年2月20日。原文：這部圍繞填海賺錢和環境問題的影片在內地和香港均獲得票房成功是罕見特例。在大多數情況下，這類在大陸獲得成功的電影並不一定能在香港獲得票房成功，即使是香港電影人操刀。

28 周星馳『美人魚』、2016年、01:29:47。聯合編劇：李思臻（香港）、何妙祺（香港）、盧正雨（大陸）、馮志強（香港）、陳慶嘉（香港）、江玉儀（香港）、曾謹昌（香港）。

29 首席娛樂官、李思臻インタビュー。「華爾街見聞」、2016年6月17日。原文：我會去 Facebook、微博上去看一些好玩的段子，從這些好玩的段子裏尋找靈感運用到自己的

という自らの創作経験を紹介し、人々に膾炙した話題をネットを通じて意識的に収集していることを認めている。さらに映画の撮影地³⁰として、懿徳軒・東湖公園・游泳跳水館・科園路・大鵬半島などといった深センのランドマークが多数登場する。すなわち、『美人魚』は香港の監督と脚本家が深センを舞台に、大陸の俳優を起用して製作した現代中国の寓話なのである。香港返還から19年目の2016年に『美人魚』が大陸と香港両方において商業的に成功したことは、いわゆる「情懷消費（ノスタルジア消費）」の表れであると思われる。

映画上映の約1ヶ月前には「興風作浪，震蕩五洲」というスローガンが発表され、また『美人魚』の宣伝に使われ挿入歌でもある『世間終有你好』が公開された。本章の第一節で述べたように、『人魚傳說』の監督羅文はかつて別の作品のためにこの曲を歌っていた。広東語で歌われるこの歌は、80年代の香港武俠作品の代表的なテーマソングの一つであり、中国語文化圏においては幅広い観衆に共有されており、彼らの心に「懐かしさ」を喚起する歌と言えよう。『世間終有你好』が初めて使われたのは『射雕英雄傳』という作品においてであり、それは12世紀前半、靖康の変から間もない時期に、モンゴルで生まれ育った漢人の郭靖という若者が中原へと旅立ち、江湖の荒波に揉まれながら成長していく物語である。郭靖は義理人情に厚く、敵・味方・親族のいずれから一目置かれ慕われる俠気ある好漢である。『世間終有你好』は混乱した江湖（社会）において俠義を尊ぶというメッセージを含んだ歌であり、現代に至るまで「武俠情懷（武俠的情念）」というイメージを喚起する力を持ち続けている。興味深いのは、周星馳が『美人魚』の冒頭で羅文の歌う『世間終有你好』を使用した理由として、羅文への敬意だけでなく、彼の監督作品『人魚傳說』へのオマージュの意もこめられていた可能性があると考えられることである。

前述した通り、漢人である郭靖はモンゴルで生まれ育ったが、モンゴルの南宋侵略の事実を知り、自分の民族を裏切りたくない一心で、母の李萍

劇本中。<http://wallstreetcn.com/node/248695>

30 搜狐旅遊「揭秘星爺《美人魚》拍攝地」、<http://travel.sohu.com/20160222/n438078507.shtml>

は自殺し、郭靖自身はモンゴルと決別する。換言すれば、郭靖は文化・教育と身分・義理の間で引き裂かれ、半蒙半漢の身体を有するがゆえに、二者択一の苦しい立場に置かれることになった。これは人魚の大きな特徴である中間性（intermediacy）と一致している。モンゴル覇権／イギリス覇権・陸上・人間と南宋／清政府・海・魚との間でアイデンティティー危機に苦しむ両作の主人公たちは、このような類似点を共有している。周星馳は羅文の歌を通じて、その歌の裏にある物語を借用し、『人魚傳說』と『美人魚』との間テキスト性を勾わせ、半人半魚である人魚の困惑を描き出しているのである。

『美人魚』にはアンデルセンの『人魚姫』やディズニー映画の『リトル・マーメイド』（1989年）の影響が見うけられるが、従来の作品では男性の人魚が登場せず、女性の人魚ばかりであるのに対し、「周星馳式」の人魚物語には香港の市井の庶民を原型とする老弱男女の人魚が登場する。すなわち、寂しく若く美しい「凝視される」対象としての女性の人魚のイメージは打破されて、人魚の定義には性別・年齢を超えた普遍性が加えられ、香港市民と重ね合わせられているのである。さらに興味深いのは、人魚珊珊がその設定上、従来の「凝視され保護される」人魚パターンから脱却して、自分の「美色（凝視利用）」を復讐の武器とする刺客、人魚一族のために抗争する女闘士とされていることだ。それに加えて、人魚珊珊は人間の服装や化粧やダンスまでも模倣する努力家である一方、彼女の魚の尾は人魚の固有のアイデンティティーであり、その一部に切れ目を入れるという改造を行なうのみで、人間の足に改変する必要はないと設定されている。しかしながら、人魚の尾は人間に如何に理解されるだろうか。周星馳は以下のシーン³¹で半人半魚という形体の不自然さをひととき強調している。

劉軒：我剛才、被人魚綁架。（俺はさっき、人魚に拉致されたんです。）

警察官：人魚是哪位？（人魚とはどなたのことですか？）

劉軒：不是哪位，是一半人一半魚的美人魚。（どなたってことはない、半分は人で半分は魚の人魚だ。）

31 映画『美人魚』、索尼影業、2016年、01:00:06。

警察官：（魚の半身と人の半身が左右で合体した絵を見せる）

劉軒：不是左和右，是上和下。（左右じゃない、上下だ。）

警察官：（魚の上半身と人の下半身が合体した絵を見せる）

劉軒：上面是人，下面是魚。（上が人で、下が魚だ。）

警察官：（同じ絵を上下入れ換えて見せる）

劉軒：頭呢？（頭は？）

警察官：（魚と人の頭が合体した絵を見せる）

劉軒：美人魚啊！電影有沒有看？就是那種長頭髮身材很好的，那種半人半魚的美人魚，明白嗎？（「美人魚」だよ！映画を見たことがないのか？髪が長くてスタイル抜群の半人半魚の「美人魚」だよ！わかったか？）

以上の場面は中国でも人気のある日本アニメ『ONE PIECE』の一節を変形して借用したということからネットで話題を呼んだが、なぜここで作者は、制服姿で厳しい表情をした公安（人民警察官）を登場させ、彼がなかなか人魚の半人半魚という形態を理解できないという描写で笑いを取っているのだろうか。この場面は、政府関係の人間には半人半魚という中間性を有した存在が全く理解不能であることを風刺しているようにも見える。

このような人間と人魚の相互不理解をめぐる重要な存在として、人魚たちの精神的なリーダーである「師太」が登場する。最初、師太は「人魚と人間は本来ならば平和的に付き合うべきであるが、昔から人類の大型船団は私たちを発見するたびに、気でも違ったように捕まえて殺害するばかりだったから、私たちは人類を敬して遠ざけるしかなかった。なんと彼らは進歩すればするほど凶暴になっていくのであり、だから人類は邪悪なのである…」³²と人間と人魚が対立することの必然性を語る。しかし、映画の結末では、その意見は「愛はすべての規則と境界線を越える。……人類は邪悪だが、正義の人もいる。愛とは寛容さであり、忍耐でもある。それは

32 映画『美人魚』、同上、2016年、00:21:04。原文：人魚和人類本應和平共處，但自古以來，每次人類的大型船隊發現了我們，都只會瘋狂捕殺，所以我們對人類也只能敬而遠之。誰知道他們越進步就越暴戾，所以人類是邪惡的……。

時間の試練を乗り越え、永遠に止むことがない。」³³と一変しており、それまでの対立は解消されて、敵味方の和解という主題が浮上することになる。かくて物語は人間と人魚が、人の足と（奇妙に改造された）魚の尾、また大陸と海というそれぞれの差異を保留したまま、自由に生きていくという童話のようなエンディングにたどり着くのである。

香港返還から約20年が経過した現在、「一国両制度」には諸々の問題が生じている。特に、香港映画の実態は大きく変わってきた。CEPA（中国大陸・香港経済連携緊密化取決め）の締結（2003年6月）と実施（2004年1月）によって、香港製中国語映画は中国大陸で「国産映画」として扱われるようになり、大陸と香港の協同制作映画における香港側のスタッフと出演者の割合の制限も大幅に緩和された。³⁴このことによって、杜琪峰・徐克・陳可辛・許鞍華などといった中堅映画監督がそれぞれ「北上」して大陸で創作を始めたが³⁵、周星馳も例外ではない。特に『美人魚』は、大陸・香港の観衆が共有する香港武俠映画への懐旧の思いを喚起した上で、それに加えて、喜劇映画でありながら香港独自の不安定なアイデンティティーを表現し、「香港情念」とも言うべき特別な情感を作り出した。周星馳は映画中でパロディを多く使い、香港返還後の創作のあり方を探索しつつ、「香港情念」を巧妙に利用している。大陸市場に迎合すると同時に、香港アイデンティティーを宣揚し大陸における理解を求めるという意図のもとに、香港の監督は『美人魚』の製作において主体性を発揮し、香港の庶民を人魚族に投影したのである。

おわりに

日本と香港の映画監督は、香港返還前後、金髪のセクシーな西洋の象徴あるいは想像の産物としてのマーメイドを用いて、香港への想像を展開し

33 映画『美人魚』、同上、2016年、01:05:05。原文：愛超出了一切規則和界限……人類是邪惡的，但是也有正義的。愛是包容，也是忍耐。他經得起時間的考驗永不休止。

34 吉川雅之、倉田徹『香港知のための60章』、明石書店、2016年3月25日、325頁。

35 「港片導演北上CEPA十年」、時光網、2013年。<http://news.mtime.com/2013/12/02/1521253.html>

た。人魚は「半中半西」、また水中と陸上の双方で生活する「半人半魚」という中間性を有した表象であり、西洋化された中国人（香港人）の文化的表現として映画監督たちに選択されてきた。本章は、返還前後に公開された、香港をめぐる三つの人魚物語を取り上げ、日本の映画監督・小説家である岩井俊二、香港の映画監督である羅文と周星馳のそれぞれが作中に潜ませた人魚と香港の関連性を解明すると同時に、香港の人魚表象に対し解釈を試みた。

第一節では、返還前の1994年公開の『人魚傳説』が、政治的・経済的な不安による移民か残留かという大恐慌状態にあった時代を背景に、人間社会でいきいきと生活するものの、多方面からの圧迫により生存の危機に直面して海に帰らざるをえなくなる可憐な「美人魚」を描いたことについて述べた。外からはハリウッドの衝撃、内では経済・政治・文化の急激な変化に対する不安に直面していた香港の映画人は、人魚の小美の境遇を通じて、香港返還前の自らの複雑錯綜とした心情や香港情緒を端的に表現したと言えよう。

第二節では、香港返還を目撃した日本人岩井俊二の視点から、異色の陸上・海中人魚を通じて表現された現代香港のイメージに注目した。岩井は香港の植民地としての歴史が始まってから2016年に至るまでの海家の運命を叙述することで、人魚が母体に回帰するという宿命的かつ壮大なテーマを巧妙に描き出した。興味深いことに、香港の監督たちの強烈な感情とは対照的に、岩井俊二はカメラアイのような冷静な歴史の観点および香港情緒が見落とした「回帰」の角度から香港における人魚のイメージを創出したのである。

第三節では、香港返還から約20年を経た現今の香港で、地元の映画人が人魚を私的な「情念消費」の場としながら、そのアイデンティティーが理解不能であるというジレンマと、異種族の共存の平和への願望とを表現した『美人魚』をめぐる考察を行なった。具体的には『美人魚』と『人魚傳説』との関連性と、その「情念消費」について検討した上で、周星馳の表現した人魚（闘士、庶民）の表象を分析し、香港返還後、映画監督が香港の特殊な社会状況に対応して生み出した人魚（香港）アイデンティ

ティーの妥当性を読み解いたのである。

本稿で取り上げた人魚の表象は、香港の「 GIVENNESS（不安定性）」からもたらされた結果であるというよりもむしろ、香港映画人および香港、そして香港に強い共感を抱く日本人の岩井俊二が主体的に創出したものである。香港映画監督による二作の香港人魚映画の間には明確な系譜関係が存在する一方、岩井が書いた香港の人魚小説が香港人魚映画からいかなる影響を受けたのかを証明するのは難しい。しかし、彼が香港の歴史の「傍観者」として、香港をめぐる人魚をテーマとする作品の系譜に自分なりの解釈を出したことは、文化的に連動する日本と香港の緊密な関係の一端を示しているといえよう。

【附録】 岩井俊二小説『ウォーレスの人魚』

時間	歴史事件	登場人物	出来事
1809		ダーウィン誕生	
1823		ウォーレス誕生	
1842	南京条約		
1859			ウォーレス、進化論論文原稿をダーウィンに送付
1859			ダーウィン『種の起源』発表
1860	北京条約		
1882		海洲化の長男 海洲化誕生	
1883		海洲化の次男 海洲慶誕生	ウォーレスが香港の雑技団で妊娠した人魚を発見
1884		海鱗女誕生	
1898	九龍租借条約		海洲化と人魚の娘海鱗女、結婚・妊娠
1913			『香港人魚録』出版とウォーレス逝去
1914	第一次世界大戦		
1996		ジェシーと海原密、香港で誕生	
1997	香港返還		海原密の人間の養父母が海難に遭遇
2009			海洲化（海原修三）と海原密、逗子に移住
2015			ジェシーと海原密、香港で出会う
2016			ジェシーと海原密、海に還る